

## 教育改革の動向と図画工作科・美術科教育の現状と課題についての研究

- 相田 隆司 (東京学芸大学美術・書道講座)  
 浅野 恵治 (東京都立工芸高等学校)  
 荒川 洋子 (新潟市美術館)  
 飯室 一 (武蔵村山市立雷塚小学校)  
 柴崎 裕 (多摩市立多摩第三小学校) \*研究協力者  
 ◎柴田 和豊 (東京学芸大学美術・書道講座) 上野美津穂 (東京学芸大学修士課程・学生)  
 立川 泰史 (東京学芸大学附属小金井小学校) 関根 史恵 (東京学芸大学博士課程・学生)  
 濱脇みどり (西東京市立田無第一中学校) 矢木 武 (東京学芸大学・非常勤講師)  
 葉山 登 (川村学園女子大学幼児教育学科) 代表連絡先: k-sibata@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】 教育改革 図画工作・美術教育 身体感覚 児童・生徒の主体性 デジタル時代

### 1. はじめに

この10年の教育をめぐる変化は大きいものであった。教育政策レベルでは、児童中心主義の系譜に連なる「ゆとり教育」から、知識・技能に関する基礎的・基本的学習を重視する系統主義的な方向へと、舵は切られている。しかし、各教科を担う教員レベルに目をやると、それぞれが関わる教科内容に関して、何が問題であったかをリアルに把握しかねているという状況も見られた。

そのことを考えると、図画工作・美術科が新たなステップを踏み出すためには、新学習指導要領に象徴される現今の教育改革の方向性を理解していくことと並行して、各自の視点で10年来の動向を把握しておくことが必要になってくる。何を継続し、何を変更し、何を付け加えるかの整理を通して展望が開けてくるといってよいのである。

それゆえ、本プロジェクトを構成する各校種の教員がそれぞれにこの10年を振り返り、何を感じ考えてきたか、どのような問題意識をもってきたかを紹介しあい、議論を重ねることで、美術教育が当面する課題を明らかにすることを目指した。

10年という期間を強調することにはおそらく異論があるに違いない。それでは教育思潮の変遷を跡づけるには短かく十分でないとの指摘があってもおかしくない。時どきの現象の背後には、それを用意した一定の時代の推移があり、思潮についての考察は20・30年の幅で行うのが通例であるだろう。にもかかわらず10年にこだわったのは、「ゆとり主義から学習主義への転換が図られるこの10年が美術教育にとって何であったか」についての冷静でまとまった言説が見当たらないことによる。本プロジェクトは、その空白を埋めようとする一つの試みである。

### 2. 本プロジェクトの目的

上記のように、図画工作・美術教育の新たな展開を可能とするために、10年来の実践を振り返ることを中心にしていたが、より細かくは次のような視点があった。

- (1) 各校種での捉え方における共通性と差異を知ること、近年の教育動向を相対化し、客観的に見ることができるようにする。特に基礎・基本についてのいろいろな考え方を探る。
- (2) プロジェクトでのそれぞれの報告を通して、問題群を導き出し、実践の方向性の大枠を浮かび上がらせる。

- (3) 美術・造形活動が有する教育的機能・力について再考する。
- (4) 学習指導要領の変更点を考察する。

### 3. 本プロジェクトの実施

平成20年度は10回の研究会を行った。プロジェクトメンバーが順番でこの10年のそれぞれの実践を報告し、教育の現況をできるだけ多視点的に捉える機会を設けた。

そのうち第7回の研究会には矢木武氏(東京学芸大学・非常勤講師)を、また第9回には長田謙一氏(首都大学東京)を講師に向かえ、お話し頂くとともにディスカッションを行った。講演のテーマは以下の通りである。

- 矢木武「造形遊びの過去・現在・未来—造形遊びから考えた教育の現状と今後の課題」
- 長田謙一「新学習指導要領をこの30年の流れから見る」

さらに平成21年3月に行った最終回の研究会は「平成20年度研究成果報告会」とし、各校種に及ぶ6件の発表があった。発表テーマは以下の通りである。

#### 小学校

- 柴崎裕「指導者が求めてきたものから—この30年の東京都図画工作研究大会の記録から考える—」
- 立川泰史「図画工作科学習における社会文化的な活動のデザイン—相互主体的な関係を媒介する文化的道具を生かした活動構成の視点から—」

#### 中学校

- 荒川洋子「若者の現状から考える美術教育のこれまで、これから」
- 濱脇みどり「消費でなく、参加でなく、自分が主役として行う美術」

#### 高等学校

- 浅野恵治「デジタル時代の生徒群像—ロジカルな感動とアナログ的コダワリ」

#### 大学

- 葉山登「感性的存在を目指す美術教育」

平成21年度は7回の研究会と1回の研究旅行を行った。21年度の基本は前年度の一連の発表・ディスカッションから問題群を抽出し、図画工作・美術教育が取り組むべき課題を明らかにし、実践の方向性を浮かび上がらせることへ進むことであった。その成果はCDに収録された研究報告に反映されている。研究旅行は8月後半に行った。本研究プロジェクトのメンバーである荒川が勤務する新潟市美術館などで開催された新潟市主催「水と土の芸術祭」と「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ—」を訪ね、現代社会における美術の可能性を考えるとともにディスカッションの機会をもった。両展とも、地域と人を結びつける基軸としての美術の可能性を多様に追い求める、実験精神に満ちた大規模な国際展であった。

なお、プロジェクトの実施の過程(20年度)で、講演者としてお願いした矢木武氏と、研究の記録を依頼していた上野美津穂、関根史恵さんのふたりについて、研究内容にも意見を述べる研究協力者としての位置づけをあらためて行った。

### 4. 本プロジェクトの成果

#### 4-1

2年間の研究を通して、大きく見て美術教育が取り組むべき三つのテーマが浮かび上がった。それらは、図画工作・美術教育が人間をめぐって、変わることに深く関わっていることを示すものであった。

具体的には以下の諸テーマである。

- (1) 身体感覚の後退とそれへの対応
- (2) 子どもたちの主体性ならびに子どもたちの間の人間的な絆の喪失と、それらを回復するための模索
- (3) デジタル時代における感性の変容に即した美術教育の構想

それぞれの概略は次のとおりである。

(1)の課題が意識される背景には、鮮烈な直接体験の機会が減少しているという現代社会の問題状況がある。それに対し、造形活動は人間の原初の層に関わるものであり、もの・素材と直に触れ合う実体験の中で、感覚的な目覚めが常に進行しているといつてよい。それだからこそ、造形的な直接体験の中で五感を開いていくことは古くて新しい課題といえよう。

(2)は自尊心をもてない子どもたちが少なくないこと、子どもたち相互の結び付きが希薄であるとの認識から発するものであり、表現活動のもつ意味の大きさをあらためて気づかせるものである。表現は「私」への問いから始まる。その問いは主体の確立に大きく関わるとともに、人と人とを結びつける絆の芽となっていく。子どもたち一人ひとりの表現を支える取組みの大切さは、いくら強調してもし過ぎということはないと考える。

(3)の背景には現代社会におけるメディア状況とデジタル化の趨勢が控えている。そしてそのことは図画工作科・美術科の変貌を促す。造形活動は、実体験と並んで、仮想のイメージの世界をも現出させてきた。伝統的にその役割を担ってきたのは絵画である。しかし、デジタル化は今までにない自由なイメージの創出を可能としている。それは美術教育の拡大・変容を促さずにはおかないものである。

これらの課題群に沿って研究が進められたが、CDには次の論考が収められている。

#### 身体感覚に関わるもの

- 立川泰史「図画工作科における身体感覚と感性をつなぐ題材の試み」
- 葉山登「教育の在り方と生活の質的变化に起因する身体感覚の後退と図画工作科教育の対応」
- 矢木武「大学の教員養成における図画工作科実習の必要性とその実践について—子どもたちの現状とそれに対する対策と言う観点からのアプローチ—」

#### 主体性に関わるもの

- 相田隆司「美術教育の現状と課題に関する題材論的一考察」
- 荒川洋子「主体性を育み、人と人がつながるための美術・教育とは」
- 飯室一「覚醒への道—表現の主体をめぐって—」
- 濱脇みどり「中学校に美術の時間があることをどう捉えて美術の活動を組み立てていくか」
- 関根史恵「過去20年の変化と鑑賞学習の重点化における『まなざし』の所在—愛知県の社会教育施設における活動と鑑賞教育への対応—」

#### メディア状況に関わるもの

- 浅野恵治「デジタルの潮流と流転する教室」
- 柴崎裕「6年『水のカタチ』(造形遊び・写真作品)から、デジタル・メディア・リテラシーの出発点を探る」
- 上野美津穂「題材を通して考える美術教育の可能性」

## 4-2

本プロジェクトの目的に記したように、いまひとつの課題として新学習指導要領の変更点を明らかにすることがある。それについては、新たに記されるようになった「共通事項」に注目し、その背景と意味を分析した。このことを反転させていうと、共通事項についての記述以外には、図画工作科・美術科の学習指導要領には大きな変

更点がなかったということである。例えば、学習を強調する前に、子どもたちの表現への関心・欲求を大切にしようとする点において、教育領野全体の中でも最も「ゆとり教育」的であった「造形遊び」は、新学習指導要領においても図画工作科の中核的な位置をしめ続けているのである。そのため次の考察を報告書に掲載することにした。

○ 柴田和豊「共通事項をどう考えるか」

一言でいって、共通事項は「何に向けての図画工作か、美術教育か」を明確にしようとしているものである。造形性をめぐる学習を進める中で、自分の感覚に目覚め、自分を核とする活動に出会うことの大切さ、自分のイメージ・世界を作り上げていくことのかげえのなさをあらためて強調するとともに、それらによって得られた力で子どもたちが向かうべきものを取り上げているとあってよい。しかし、このような基本的な指摘は「いうまでもないこと」を再確認しているに過ぎないようにも思える。独自の造形表現が大切なこと、それを可能にする力を育てていくことが大切なことは、すでにひとつの共通の了解項目になっているはずだからであり、それゆえに共通事項の登場は唐突で分かりにくいものとして多くの人たちに受けとめられている。

図画工作・美術教育も学力論争の中におかれている。基礎・基本という言葉の流布は、あらためて学習課題の中心に表現技術の修得を位置づけようとしている。「内容」と「形式」という言葉があるように、表したいものと、そのための方法が噛み合っていてこそ表現活動は成り立つからである。しかしここで注意すべきは、表現技術の強調が両者の有機的な関係を崩しかねないことである。分かり切ったことを記しているに過ぎないと見られがちな「共通事項」の記述は、それらのバランスを重視するゆえの工夫といえるだろう。

このような捉え方から共通事項に関して「共通事項の背景」「技能中心的な考え方の是正」「共通事項の読み方」「図画工作科・美術科の大きな特色」「感覚の広がり」「造形が育むイメージの世界」という一連の視点で考察を行った。